たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No. 31　平成6年7月29日

『御堺堀』・伊達家屋敷内舟寄場

江戸の考古学おぼえがき

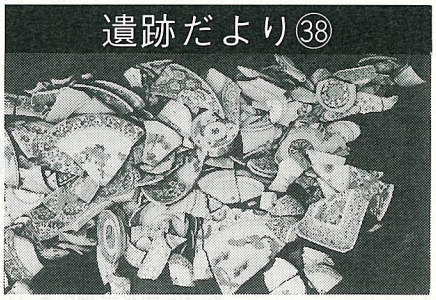
センターが、多摩ニュータウンから都心部へ調査を展開し始めてから早四年が経過した。尾張藩上屋敷跡地、旧都庁跡地の土佐・阿波藩上屋敷跡地、さらに、『汽笛一声新橋を…』と唄われた汐留遺跡等、江戸時代から明治時代へと考古学のメスを入れ始めている。

百万都市といわれた世界でも屈指の近世都市「江戸」、幾度かの大火にもかかわらず、幕藩体制は揺るがず、直ちに復興を遂げ、見事な街造りを行ってきた。その整地は、ゴミ処理が最大の仕事であったようで、その場所に大きな穴をあけ埋めてきた。つまり、このゴミ穴こそ、縄文貝塚と同様、江戸の様子を知る最大の情報源である。

さらにすごいことは、上水道の土木事業である。かねがね、なぜ江戸時代に入ると寺院建築に使われていた桧がなくなり、欅にとって替わってしまったのかと不思議の念を抱いていたがようやくその謎が解けたようである。それは、江戸市中に張り巡らされた上水道の木樋と井戸に使われた桧の膨大な量、発掘すると数百本単位で木樋が検出される。さらに支管に使われた孟宗竹の量は相当なものである。森と人間との営みのなかで、江戸時代における都市建設を考える時、木の供給について細かく追求せねばならない大きな問題がある。

（石井　則孝）

遺跡だより㊳



旧汐留貨物駅跡地内遺跡（仮称　汐留遺跡）は、港区東新橋にあり、海岸沿いの平坦な低地（沖積地）に位置します。遺跡は、南北1100ｍ、東西280ｍという広大な面積です。92・93年度範囲として約28000㎡を調査し、本年で3年目を迎えます。

江戸時代は、北より龍野藩脇坂家上屋敷（兵庫県）、仙台藩伊達家上屋敷（宮城県）、会津藩保科家中屋敷（福島県）などの大名屋敷がありました。いずれも17世紀中頃までには、屋敷を構えています。92・93年度は、脇坂・伊達両屋敷の一部を調査しました。

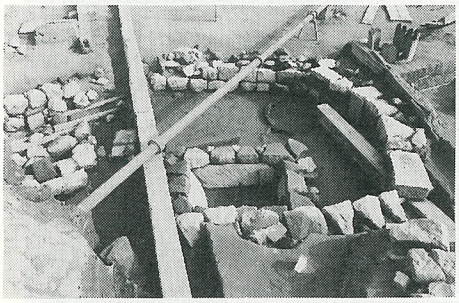
では、藩邸が構えられる前にはどのような状況であったかというと、「江戸前島」と呼ばれる駿河台方面からのびる半島状の砂州があり、西側を「日比谷入江」、東側を「江戸湊（みなと）」と呼び、海でした。よって、三藩邸は大規模な造作を加え埋めたて工事を行い敷地を確保しています。調査では、埋めたての際の土留めの板、石垣などの施設が確認できました。

脇坂家屋敷は、当初下屋敷（『武州豊島郡江戸庄図』1632年より）として寛永年間にはすでに拝領されており、明暦3（1657）年に添地を加え上屋敷となります。以後、廃藩まで同家の屋敷でした。

92・93年度の調査範囲は、屋敷内における江戸屋敷勤めの侍の居住区域および庭の空間にあたります。屋敷外郭の長大な長屋の礎石、石組・板組の排水用の溝および桝、床下収納施設である室（むろ）、胞衣皿（えなざら）（後産の胎盤を収め埋めるための容器）、園池、ゴミ処理のための穴や板組の施設など非常に多くの遺構が認められました。その他、埋められた状態の甕や桶（直径40㎝、高さ50㎝）があり、大小の便所と考えています。

一方、伊達家屋敷（浜屋敷と呼ばれる）は、寛永18（1641）年に下屋敷として拝領し、延宝4（1676）年には上屋敷としています。幾度か火災に見舞われていますが、脇坂同様、幕末まで存続します。

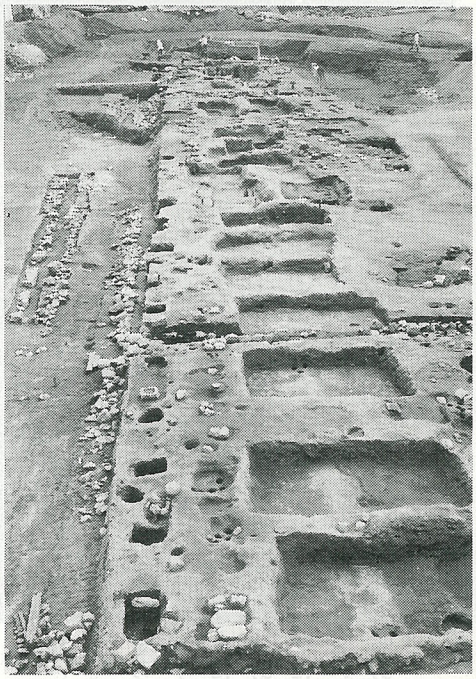
『伊達家芝上屋敷絵図』（享保19－1734～天明4－1787年）に照らすと、長屋地区および御主殿（ごしゅでん）の奥向きにあたる地区を今までに調査してきました。



伊達・御主殿内庭池

脇坂屋敷側（北側）の境の堀に面する地区（長屋地区）では、長屋の礎石列、規模の大きなゴミ穴、瓦溜め（火災等で使用できなくなった瓦を捨てた穴）、石組の排水溝などが認められました。また、南北に延びる規模の大きな石組排水溝を境に南側では、御主殿奥向きの建物に伴う礎石（跡）が多数（数度の立て替えが考えられます）、大規模な瓦溜め、屋敷の内庭の池など屋敷内の多彩な顔を見せてくれました。また、石垣で構築された規模の大きな舟寄場が認められ、脇坂家屋敷との境を画する堀（幅約3.6ｍ、現存する深さ約1.8ｍ）ともども、江戸の土木工事の並々ならぬ力が感じられる遺構です。

さらに、両屋敷では地下に水道管が縦横に埋設されています。木製の管を木樋、竹製を竹樋と呼んでいます。いずれも長さに制約がありますので、3～4ｍの長さを単位につないでのばしています。また、樋は井戸枠として用いますが、水路の



脇坂・長屋礎石と瓦溜め

伊達・土留め板と舟寄場石垣

変更や傾斜の確保としての役割もあります。当時の水道は、圧力をかける現在のものとは違い、自然の流れに頼るものでした。これらの上水は、玉川上水（羽村の堰より取水）の最も末端にあたります。

世は明治となり、近代化の号令のもと大きな変革を迎えます。ここ汐留の地も例外ではなく、屋敷地は新政府の所有となり、鉄道用地とされます。よって、屋敷はことごとく壊され更地にした後、明治3（1870）年には鉄道敷設の最初の杭が打たれます。明治5（1872）年10年14日、華やかに開業式典が催され「汽笛一斉」の響きも高く1号機関車の運転が開始されました。ターンティブル・機関庫・客車庫など、調査によって確認できた新橋ステーションに関係する諸施設の跡や汽車土瓶（駅弁に付きもののお茶の容器）などの遺物は、当時の駅の面影を彷彿とさせてくれます。

江戸初期の埋めたて、大名屋敷の様子、江戸から明治の変革、駅の歴史など汐留遺跡は、多様な側面をわれわれに示してくれます。

（石崎　俊哉）

旧新橋駅構内・転車台

数ある鉄道施設の中でも私たちを驚かせたのは、新橋駅開設当時（明治5年10月14日）の機関車用転車台の発見でした。もちろん土台部分の検出ですが、直径約13m、凝灰岩製の切石を組んで構築されていました。ただ下底面がコンクリート製だった為、この転車台が駅開設時のものか疑問視する声がありました。

日本で最初に大蔵省土木寮摂綿篤製造所からセメントが出荷されたのは明治8年（工場建設は明治5年）のことですから、明治5年6月20日（旧暦）に完成した本転車台には国産ではなく輸入セメントが使われたと考えられます。

当時の日本には西洋文明を取り入れる必要から多くの外国人がおり、そして彼らの宿舎建設の為にかなりのセメントが必要とされました。しかし輸入セメントは高価だったらしく、明治政府はその支払いに苦慮したようです。ちなみに明治3年我が国は8トンのセメントを輸入していますが、その値段は300円だったと記録にあります。

日本における最初のセメント使用例は文久元年（1861年）の長崎製鉄所建設時といわれ、その後横浜や横須賀の製鉄所、各地の灯台等に使用されました。値段は1トン25両（城ケ島灯台）だったそうです。いずれにしてもかなり高価なもので、これが明治政府をして早期のセメント国産化（米国に遅れることわずか4年）を実現させることになります。

この新橋停車場の転車台は大正2年の『新橋停車場平面図』には見られるものの、大正4年の『停車場平面図』には既に見当りません。恐らく大正3年東京駅開業による業務変更（汐留貨物駅の誕生）が原因と考えられます。

次に駅開設当時の新橋・横浜間の運賃についてですが、上等・中等・下等とありまして各々が1円12銭5厘・75銭・37銭5厘でした。当時の東京の米の価格が1升（1.4kg）平均4銭1厘程ですから、下等でさえ米9升（約13kg弱）分に相当します。

これは現在の金額で言えば、5000円程（高騰以前の標準価格米で換算）となり、新橋・横浜間の現行JR運賃440円の約11倍強となります。まして中等はこの2倍（1万円）、上等で3倍（1万5千円）だったのですから、一般の庶民にとっては決して安い乗り物とは言えなかったようです。

（福田敏一）

映画鑑賞会の開催

6月5日（日）午後1時半から2時すぎまで、昨年度、多摩東京移管百周年記念事業の一環として東京都教育委員会と当センターとが共同で製作した映画「甦（よみがえ）る歴史―遺跡発掘の記録―」の初公開を行いました。

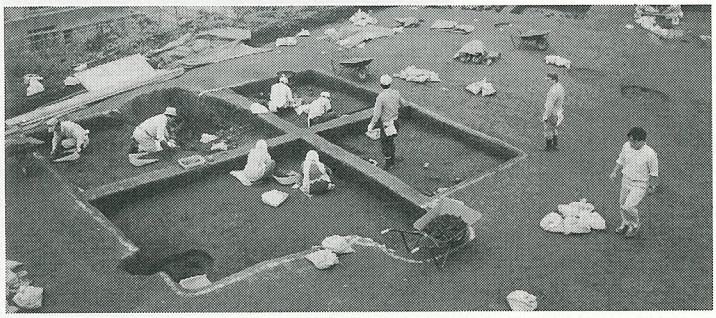
遺跡の発掘とは、どのような方法と過程を経て行われるものか、一般の方々には、以外に知られていません。遺跡の発見から発掘、報告書作成へ、さらに資料の保管と公開・展示までの過程をわかりやすく紹介するための映画です。一昨年から昨年にかけて調査された古墳時代の集落である、町田市小山に位置した多摩ニュータウンNo.300遺跡を主な舞台として製作されたものです。さらに遺跡の営まれた時代の政治的なようすなどの紹介も行っています。

当日の参加者は103名でした。

日の出分室のオープン

建設省が行う圏央道建設予定地にあります三吉野遺跡群の調査が5月から開始されています。このため、当センター分室が開設されました。

この調査には安孫子昭二調査研究係長、中西充、石橋峯幸、松崎元樹調査研究員があたります。



三吉野遺跡群の調査

文部省科学研究費補助金の交付

文部省から平成6年度科学研究費補助金交付の内定通知が当センター職員にありました。

比田井民子「旧石器時代遺跡における日常的移動距離の復元」

伊藤　健「後期旧石器時代における食物加工・調理石器の基礎的研究」

舘野　孝「古代木工ロクロの復元」

長佐古真也「近世陶磁器の産地同定と流通に関する研究」

小林　裕「江戸時代における上水施設の基礎的資料の集成―江戸を中心として―」

研究活動への助成

今年度職員研究助成が決定しました。

「7・8世紀代　土器の編年と地域性の研究」飯塚武司

「律令体制の確立と須恵器生産」鶴間正昭

行事のお知らせ

今年度も文化財普及事業の一環として左記のように催物を行います。奮ってご参加ください。会場はいずれも当センター会議室です。

○木皿作り見学と映画鑑賞会

9月10日(土)10：00～12：00

○文化財講演会

10月2日(日)13：30～15：30

「オホーツク文化の集落」

講師　前田　潮氏(筑波大学)

11月6日(日)13：30～15：30

「フィリピンの焼畑農耕集落」

講師　宮本　勝氏(中央大学)

12月4日(日)13：30～15：30

「旧石器時代の集落」

講師　佐藤宏之調査研究員

2月11日(土)13：30～15：30

「西アジアの新石器時代集落」

講師　常木　晃氏(筑波大学)

○映画鑑賞会

3月11日(土)10：30～11：30

映画「アイヌの丸木舟」上映

人の動き

3月31日付けで、瀬川渉総務課長が退職。総務課北岡文男庶務係長が交通局へ転出。また、調査研究部西脇俊郎係長が教育庁文化課へ転出しました。

後任に、4月1日付けで、青梅青年の家から佐藤修一総務課長が、教育庁から岩下博明庶務係長が、同じく、教育庁から雪田隆子調査研究係長が就任しました。

▼あとがき▲

多摩ニュータウン遺跡群の発掘の為に調査会が結成されてから、来年で30年になります。また、東京都埋蔵文化財センターが設立されてから15年の月日が経つことになります。

これを発展の為の節目としたいものです。（千）

発行
(財)東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合1―14―2
☎ 0423-73-5296
平成6年7月29日